令和８年度第３回仙台市いじめ防止等対策検証会議

日時：令和８年 10 月 16 日（金）16:00～18:00
場所：仙台市役所本庁舎８階　第５会議室
出席：氏家靖浩委員(会長)、本図愛実委員（副会長）、石川由紀委員、大曽根学委員
村松敦子委員

議事要旨

１　開会

２　局長挨拶

３　会議の公開・非公開の決定、署名委員の氏名

本日の議事について、附属機関等の設置及び運営の基準に関する要綱に従い、委員、事務局了承のうえ、公開とすることとした。議事録の署名は氏家会長と本図副会長で行うこととした。

４　議事

〇氏家会長

前回の会議において、「学校文化を生かしたいじめ未然防止の取組み」と「仙台市いじめ等相談支援室エスケット」について、現場の声を確認した上で、取組みの効果や課題などを検証することとなり、９月中旬に、学校教職員やエスケット職員へのヒアリングを実施しました。ヒアリングの概要につきまして、事務局より説明をお願いします。

〇事務局（いじめ対策推進課長）

資料１、２に沿って説明

〇氏家会長

事務局からヒアリングの概要をご説明いただきましたが、今度は、委員の皆様から視察された場所についての所感や、今の概要版を確認した上でのご意見など、総論的な形でご意見いただきたいと思います。

各委員からの報告を受けた上で、当会議としての学校文化を生かしたいじめ未然防止の取組みというものを抽出していきたいわけですけれども、見てきたところが良かったというだけでは何の報告にもならないので、そこから得られたものを今年度のまとめにし、後々仙台市の学校教育の中でいじめ防止のために学校の文化がなせる役割としてはこういうところがあるのではないかというところについて議論していければと思います。

本日は、まず学校訪問した上でのいじめ未然防止の取組みの方を最初の方のテーマとさせていただいて、次はエスケットに焦点を当てて、最後は全体を通した意見交換という感じの三本柱で進めてまいりたいと思います。

まず、大曽根委員いかがでしょうか。

〇大曽根委員

小学校１校と中学校１校を訪問させていただきました。どちらも、学校文化をご紹介いただくことをまず重視して、直接的にいじめ防止につながるわけではないですけども、その学校独自の取組み、あとは教職員の方々に脈々と受け継がれてきた文化などをご紹介いただきました。また、縦割り活動で、先輩後輩の間で受け継がれる文化を聞かせていただいて、根底にいじめ防止というか、人と人との関係性、良い関係を作っていく土台になっているので

はないかと感じることができました。中学校の事例についてですが、コロナ禍をきっかけに、希薄になっていた先輩・後輩の交流を、生徒たち自身が「自分たちで取り組みたい」と主体的に提案し、実現してきたというお話を伺い、大変興味深く感じました。一方で、実際に取組みを進めていく中では、活動になじめないこどもや、さまざまな価値観を持ち、参加しづらさを感じる生徒もいるのではないかと思います。そうした生徒たちにどのように対応し、一人ひとりが安心して過ごせる環境をつくっていくかという点は、今後の課題の一つではないかと感じました。また、小学校にも訪問させていただきましたが、こちらは学校文化に加え、コミュニティ・スクールが設置される以前から、地域の商店街の方々や、長年その地域に暮らしている方々によって、学校のすばらしさや歴史、民話などが脈々と受け継がれてきたことが、とても印象的でした。こうした文化があることで、新しく赴任された先生方も、その学校が大切にしてきたものや地域とのつながりを知ることができます。児童が自己有用感を育み、地域への愛着や郷土愛を大切にすることは、いじめの防止と非常に密接に関わっているのではないかと感じました。

〇村松委員

私は中学校を訪問させていただきました。校長先生が２年目で、その前の校長先生が行っていたことを受け継ぎ、発展させようとなさっていたという印象を強く持ちました。

いじめ防止の観点から言いますと、ことさらにいじめ防止ということではなく、何が生徒を成長させていくことになるのかという観点からアプローチされていたと思います。生徒たちを観察して、各学年の特性を分析・把握し、コミュニケーション力の強化が必要であると考え、種々の対策をとっておられました。特に従前からの活動に関しても「やる意義」を生徒一人一人に考えさせ、目的意識を持たせることに心を砕いておられると思いました。朝会に言ったことをブログでもアップし、休んでる子にも届くようにメッセージを送り続けているとか、３ヶ月に１回、部活の時間を減らして、こどもたちが自由に話せる場、先生や友達とも話せる場を設定する取組みも行っているとの工夫は、興味深いものでした。

また、前の校長先生が行っていた「あいさつ運動」を「笑顔であいさつ運動」と深める形で発展させようとなさっておられました。地域文化というか、学校に協力的で、地域の中の学校というのがすごく強い地域という土壌があって、校長先生が、その前の校長先生が取り組まれていた地域とのコミュニケーションを生かしながら、学校を含めた地域ぐるみでのあいさつ運動を展開・強化しようとなさっていました。そのほかの地域活動への生徒たちの積極的な参画も含め、地域に根ざす生徒として生徒を地域に返していく。中学校に通いながらも、地域の一員であるということを意識付けていく、自覚させる、活動だと思いました。生徒たちはもちろん、地域を活かそうという発想が土台にある先生たちもいいよねと思えるものをめざし、生徒・教職員の意見を聞き、校長先生に協力的でさまざまなアイデアを提供してくれたとのことでした。

校長先生の力量いかんで左右される取組みにも思えるし、この発想を参考にしようと思えば、どこの学校でもできるかもしれないという感じも受けました。校長先生のすごいところは下準備として、町内会長や、地域の様々なところにも顔を出し、コミュニケーションをとっていました。もちろん校内の先生方ともコミュニケーションをとって、こういうことをしたいんだというものを話し、先生方はもちろん、こどもたちからのアイデアを吸い上げようとしていました。そういう下準備を周到になされた上で機が熟したところで取り組む、地域全体もまきこんで取り組もうとなさっていて、活力をもらいました。

〇氏家会長

村松委員から見ても、校長先生のご苦労について、察せられたんだなと思います。学校の方のお話は、次のステップの時にまた議論を深めてまいりたいと思います。次に、石川委員いかがでしょうか。

〇石川委員

私はエスケットを初めて見学させていただきました。お話を伺って、まずスタッフの皆さんは本当に熱意を持ってやっているのがわかって、すごくありがたいし嬉しいことだと思いました。親御さんは学校に相談するけれども、何かうまくいかなかったからエスケットに行くというのも多いですし、学校に行く前に、第三者的な匿名性の高いところにまず言いたいという気持ちもあると思います。そういうところでお話を聞くことってなかなか難しいことだと思うんですけれども、熱意を持って相談員の方も弁護士の先生もやってくださって、本当にその熱い思いでやってくださってる人が教員以外にいるっていうところで、個人的にはすごく励まされました。学校で頑張れとよく言われるところもあるとは思うんですけれども、そうじゃない別な人も応援してくれているところがわかるっていうのは、現場の教員としてはすごくありがたいと思ったのが第一です。先ほど申し上げた通り、第三者だからとか、匿名性が多少あるところだから、ハードルが高くなく相談できるっていうところは、確かにそのとおりだと思いました。保護者の方も、学校の先生にはいろいろ言ってしまうみたいなところもあるんじゃないのかなって思うんですけれども、こちらは心理の先生とか弁護士の先生が、専門的な立場からアドバイスをくださるので、教員から言われるよりも、すっと入りやすいところってあるんだろうなと思います。論点の整理をするという点に関しても、お話を聞くと、この人の主訴って何なのかなっていったところがまず一つと、もう一つ、この話の最終決着として、どこにその目標を持って、そこに向かっていくのかっていったことがあるかと思うんですけれども、どうしても教員ってなかなかそういうところに慣れてないというか、苦情を言われることに対して、すごい慣れているかというとそうでもないですし、論点を整理するといったところは難しい部分があると思うんですけれども、エスケットに関しては論点整理をしてくれるところがありがたいですし、学校に対してもこういう点を事前にお話ししてくれるところは非常にありがたいと思うんです。どうしても教員のものの見方ってあると思うので、ここで事例は実際には出てきてないんですけど、例えば被害を訴えている人の話をずっと聞いていると、そんなことまで言わなくたってっていうところあるかもしれないんですけれども、何が言いたいのかとか、整理してもらって、学校としてこういうことをした方がいいですよとか、準備した方がいいですよって言われると、そういう視点で対応するというか、お話を伺えばいいんだなっていったところが理解できると思いますので、そういう点でも学校としては別な視点がもらえる、非常にありがたい機関だと思いました。これから先、ずっとお話を伺っていて一つ思ったのは、もちろんじっくりお話を伺って、どういう方向性でいくかとかといったところが、おうちの人とか本人と共有できればいいんですけれども、そこにはものすごく時間がかかると思うんです。そうなると、ここの本筋からは離れるんですけれども、働き方改革とか、これから保護者の理不尽な要求に対するもので、例えば目安として何分で話を終わらせるとか、放課後の時間帯でこれくらいでみたいなのを保護者に言うっていうのも、なかなかそことは折り合いがつきづらいだろうなっていう印象はありました。30 分経っているからといって、そこでお話を即終了させるという教員は誰もいないと思うんですけれども、実際に起きている事案と、その世の中全体の流れのそういったものとの折り合いの付け方は、これからいろいろ考えていく必要があるのかなと思ったところです。

〇本図副会長

事務局の皆様に無理を言って、学校文化っていうちょっとほわっとしたキーワードでヒアリングをさせていただきました。お伺いした中学校と小学校は本当に素晴らしくて、やっぱり学校文化ってあるというふうに思いました。それがこどもたちに染み入って、小学校の方ではまだ気が抜けないというお話もありましたけど、先生方が緊張感を持っておられるとしても、未然防止にこういった仕組み、文化は大きいだろうと感じました。その学校文化を生かした取組みという時に、２つの大きな視点があると思っています。一つは校長先生のリーダーシップという点です。村松委員からも、下準備とか前の校長先生がやってらっしゃった

ことっていうお言葉がありましたけど、校長先生ご自身もやりたいことはやっていきたいところはおありだと思うんですが、前の校長先生からのバトンを受け継いでるよねっていう感じがよく伝わってきて、その上での改善と持続可能性を両方の校長先生が考えておられたことに気づきました。もう一つの視点は、こういった文化が学校全体で機能してるよねという視点と、それからこういう仕組みの中で、こども同士で掲示物だとかそういったところから、こういう仕掛けの中で、前を向いていく健全な学校文化、他者を思いやる雰囲気や行動の規範というのは、それは当然あるでしょうっていう推測になりますけど、こども間で作る学校文化ってことも見せていただいた中で十分感じられることでしたし、同じく教師間でもそうだろうなと思いました。例えばＤ小学校では、２年生の教室の隣に緊急避難ができる場所が準備してあって、その教室を利用するこどもたちには、学校の先生たちが順番に担当し、緊急避難やクールダウン、あるいは自分だけじっくり勉強したいという子はその教室に行くことができます。それについて先生方が全員担当するから、順番でどういうお子さんがそこを利用するのかというのをみんなで理解していく、共有していくっていうふうにも活用していて、教師間にも学校文化が無理なく共有される仕掛けの一つでもあると思いました。この学校全体、こども、教師に加えて、先ほど申し上げました持続可能性に通じるんですけど、縦割りとか行事とか、いろいろな地域との活動も含めて、一年間のカリキュラムの中で組み込んでいるということも、いろいろなお話から理解できたところです。総じて、学校文化のゴールにあってほしいのが、こどもが自ら考えて、こういうことやめようとか、これは我慢しようとか、これおかしいよねとか言える力だと思います。校長先生のリーダーシップを一つのまとまりとして、もう一つは、その意図的な仕掛けや学校文化を作る人たちによってカリキュラムでできている、そういうものとで、自ら考えるっていうこどもの力を育てている学校文化だと感じました。エスケットの方は、とてもバランスが取れていて、やっぱりメタで考えた時に学校をサポートしていく、あるいは、学校と違うルートでこどもたちや保護者も直接関わることができるエスケットと、学校は学校でこどもたちの力を育てようとしている、やっぱり両輪なんだなということを痛感した次第でした。

〇氏家会長

この先、学校文化を生かした未然防止というところの掘り下げを進めてまいりたいと思います。私も９月９日に中学校、14 日に小学校、17 日にエスケットを訪問させていただきました。実際、学校に出向いて、いじめ防止だけでなく、学校が行っているリアルな教育活動全般になるんでしょうけれども、教職員の方の声を聞く重要性は今回もすごく感じた次第でした。この後の議論にもつながる部分になるかと思いますが、問題は学校文化という形の切り込みがいいのか、それとも学校のある立地条件がすごく大きく作用するのではないかというところも私は感じたところがありました。先ほど大曽根委員もおっしゃってた、あの小学校の方ですね。まさに商店街の中に、そこに住んではいないんだけどお店があるという方が、学校のことにも関与しているのを聞いて、学校が開かれていることも大きいと思いました。学校の存立基盤というのは侮れないのではないかと考えていて、そういうものが学校の文化を形成している要因の一つであり、それがいじめの未然防止にどのようにつながっているかが、次の議論の時にまた少し踏み込めたらとも思いました。

エスケットについて、過去に移転があったと聞きましたが、学校ではないという要素がありますし、市役所からも遠からずで、今の場所はいい距離だなと思いました。エスケットの議論に踏み込んだ時に触れなくてはいけないことなんでしょうけど、やっぱり親御さんたちが、なんか我が子が気になるっていう時でも、学校に相談する方が敷居が高いんだなっていうのは今回すごく実感した部分でした。学校の側も敷居は下げてますよっておそらく言うと思うんですけど、少なくとも我が子のことで学校と相談することを考えるときに、エスケットがいい意味で介入しているっていうのは、やはり行ってみて初めてリアルに気づかされた部分です。エスケットが今後話題になるような周知の方法を考えなくてはいけない部分と、周知を進めていくと、おそらく利用する方が増えると思われます。今もしエスケットが微妙

なバランスで持っているとはいえ、今がとてもいい状態になっているのを維持していくにはどうしたらいいかということを、後半では話ができればなというふうに思うところです。
ここからは、学校文化を生かしたいじめ未然防止の取組みということで、学校を訪問した上で得たことで、いじめの未然防止につなげられると思うこと、今回すごく印象深いところを見学させていただきましたから、どうしても褒めたくなる部分はあるんですけども、それでも起きるのがいじめなんだと思うんです。人間関係のいさかいってやっぱり起きるんだと思いますので、とてもいい各学校の試みを拝見してきたところではありますけども、それでも、もしこどもたちのトラブルが起きてしまう、SOS を発する子がいる時に、学校はどういった場にならなくてはいけないのか、あるいは現在すでにいい形になっているのであれば、それを継続させるためにはどうすればいいのかということで、学校文化を生かしたいじめの未然防止の取組みの方を少し掘り下げてまいりたいと思います。資料１にも委員の所感はまとめてありますが、委員の方から、この点についてお気づきがあればご意見いただけないでしょうか。

〇村松委員
先ほども申し上げましたが、継続性や持続性の観点で、考えることも必要かと思います。あの力量のある校長先生のもとで、教師もこどもたちも同じ方向を向いて、頑張って挨拶運動しようねという風になっているところに、どこかから「なんでそんなことやってるの」というようにクールダウンさせる人が現れたり、その人がマウントを取ったりしたりすると、どうなるのかなと思います。その場合でも持ちこたえられるようなものが必要じゃないかという気もしています。校長先生が転勤なさった後も、同じような意識とかそういうことで維持するにはどうすればいいのかということも課題になるのではないかという気がしました。

〇氏家会長
大変重要なポイントだと思います。公教育である以上、先生方の異動も常だと思いますし、また、先生方の異動と同時に、仙台市の学校として一定の質を保たなくてはいけないと考えたときに、あの学校とこの学校があんまり極端に違っても困る部分がやっぱりあるでしょうし、しかし、その立地条件であるとか、生徒さんの児童の方のその時の状況などによっても、おのずと変わる部分もあって、本質的な部分と柔軟性を両方兼ね備えている校長先生に束ねていただかなくてはならないものだと思います。そういうのがうまくいっていると、おそらくトラブルがあっても最小限で、いじめであれ、何らかのいろんなアクシデントがあっても乗り越えていける、もしくは最初からそういうのが起こらないようになる部分はあるんでしょうが、校長先生に求められるものが非常に大きいんだろうなというのは、単純な組織のリーダーのレベルではなく、こどもたちであり、教職員組織であり、あるいはバックグラウンドとなる地域であり、仙台市の全体的な方向性、いろんなものがクロスするところにあるかと思います。でも、避けては通れない要素ではありますよね。

〇石川委員
もちろん校長がビジョンを持って、こういう学校経営をしたいとか、こういうこどもに育てたいというのは、どの校長先生も持っていると思います。こどもの実態や地域の実態をもとに、今年どうしていくかというのは、どの先生もやっていると思うんですけれども、確かに構成されるメンバーで、その時の方向性が違ってくることはあるのではないかと思います。すごくリーダーシップがあって、みんなで同じ方向に行こうという校長先生もいますし、大きい目標はもちろんあるけれども、みんなでどういう風にしていったらいいかって言いながら進めていくタイプの校長先生もいると思います。それは校長先生やその時の構成メンバーによる気がするんです。学校ヒアリングの資料をいろいろ見ていくと、いじめをなくすためにわざわざ何かを取り組むというよりは、どの校長先生も、今あるものを生かして、そこでこどもたち自身を育てていこうと取り組んでいるところは感じました。いろいろな仕

掛けというのは、それぞれこどもたちの様子もあるし、地域の特性もあると思うんですけれども、いじめって人と人との関わりの中で発生してくるとか、いじめって言っていいのか、その認識の違いというのもあると思うんですけれども、友達の話を最後まで聞くルールを設けているとか、そういうところが重要であって、その大曽根委員がおっしゃっているのは、本当にその通りだと思っています。学校では、自分と違う人とどう関わっていくのかとか、その時の自分の気持ちを自分の中でどう処理していくのかとか、そういったことをいろいろな手段を通じて教えていくっていうことだと思うんです。その中でこどもたち自身とか周りも成長していくっていったところが、いじめの防止とか、あとは共生社会じゃないですけれども、人と一緒に違う他者と生きていく世の中をつくる構成メンバーの一人として成長できるっていったところがあると思うので、どの校長先生も拝見してると、それはされてるのじゃないかなっていうところは感じたところです。

あともう一つ、学校の中に児童支援部っていう組織があって、そこで情報共有しているっていう、もちろんそういう部署的なものを作ってやってますっていうのも大事だと思うんですけれども、もっと大事なのは、そういうのがあってもなくても、先生たちが情報を共有できるとか、自分たちがこう思ってるんだって言ったところを、その組織の中で、こどもたちが発信できることもですが、先生方が同じ組織の中でそれを自由に自分の意見を言えるというか、そこを言ったら何か思われるから、ちょっと言わないでおこうみたいなのがなく、そういう組織づくりが非常に大事なのではないかと感じたところです。

〇氏家会長

校長先生として、良い意見でも、場合によってはちょっと厳しい意見であっても、教職員からも、こどもたちからも、いかに意見を上げさせやすくするかというところは、心を砕いているということになりますよね。ご指摘いただいたところ、なるほどと思います。

本図副会長から、何かあればお願いします。

〇本図副会長

先ほどの繰り返しにはなるんですけど、校長先生のリーダーシップに尽きると思います。村松委員が、ある先生の力量が高くて、もし次の校長先生がそうではなかったらっていう話題をおっしゃっていましたが、理想論としては、どの先生も校長になるからには、こどもたちの健全な心と行動力を育てるリーダーシップを持っていて、そういう覚悟で校長先生になっていただきたいと思います。そして、そういった気持ちで仙台市の先生方になっていらっしゃると思います。その上で、先生方お一人お一人がいじめ未然防止で行動できる力とこどもとの関係性を作れる、こどもが相談できる先生、そもそもそういったことがおかしいよねっていうふうになる学級づくりができる先生方を校長先生が育てていく、支援していくということだと思います。もう一つは、カリキュラム全体の中でいじめ未然防止につながる理解と力を年間通して育てていく取組みも校長先生のリーダーシップだと思いました。

〇氏家会長

この間の議論をうまくまとめていただいてありがとうございます。まさに地域の問題というより、まずは校長先生に求められる資質、資質という言い方がいいかどうかというのはありますが、少なくともリーダーシップとは言えますよね。この間の大きい流れでいくとすると、校長先生ご自身の場合、力量形成というのも多分使える表現ではないかと思います。

次に、大曽根委員、いかがでしょうか。

〇大曽根委員

学校文化のあり方については、なんとなくこうではないかという予想を持っていましたが、実際に事例を見ることで、自分の中で答え合わせができた部分もありました。一方で、学校文化だけでなく、地域文化というものも確かに存在し、それを大切にする必要があると

改めて感じました。私が考えるいじめ防止の一つは、多様な人が関わりやすい環境が整っていること、つまり、閉鎖的ではない環境をつくることです。これは、こどもたちの居場所が多様に存在することにもつながります。安心して過ごせる場所や、困ったときに頼れる人とのつながりが複数あることは、それだけ多くの人の目がこどもたちに届くということでもあります。例えば、いじめが発生する背景の一つに、周囲がいじめを肯定してしまう環境があります。誰かをからかっているこどもたちと一緒になって周囲が笑ってしまえば、加害側は「みんなも賛同してくれている」と受け止めるかもしれません。一方、いじめを受けているこどもは、ますます声を上げにくくなってしまいます。

こうした状況に対して、さまざまな人の目が届く環境であれば、異なる価値観を受け入れやすくなり、周囲の人もいじめを止める行動を起こしやすくなるのではないでしょうか。地域でさまざまなイベントが開催され、多様な人との関わりが生まれ、こどもたちが安心して過ごせる居場所が数多く存在することは、いじめ防止においても大切な要素の一つだと考えています。ただし、地域文化には一律の正解があるわけではありません。さまざまな事例がある中で、その地域の文化が本当に望ましいものなのか、丁寧に考えていく必要があります。かつては良いとされていた慣習であっても、現代の社会やこどもたちの状況には合わなくなっている場合もあるでしょう。また、昔から住んでいる人が多い地域もあれば、新しく転入してくる人が増えている地域もあり、それぞれに異なる特徴や課題があります。だからこそ、それぞれの地域の実情に応じた対策が講じられているか、また、その対策が実際にいじめ防止につながっているかを継続的に検証していくことが重要だと思います。さらに、そうした取り組みや検証結果を積極的に情報発信し、地域の人々が必要な情報を得られる環境を整えていくことも、大切な取り組みの一つだと感じました。

〇氏家会長

大曽根委員のお立場上、学校だけで完結しないところに対して、学校からの求めに応じる部分もあるでしょうし、学校の方に関与していく部分もあるかと思います。今のような、学校の文化というふうに最初は考えた部分がありますけども、その学校文化の中で地域の特性というのはすごく大きいし、そこに、教職員や児童生徒だけではない、保護者や地域の方などの要素が明確に位置づけられていると、いじめの未然防止もそうですし、もしくは何らかの不具合があった時でも、そういった方々が学校に関与しやすくなるというのは、今回の学校訪問で体感された部分ではないかと思います。そういったものは、学校の周辺に比較的人がいる学校と、そうでない学校、こういうところが同じものではないと思うので。しかし、なんとかそこら辺は活用というか、少なくともその学校の資源として使っていく方向に持っていけるものがあるといいということですよね。

〇大曽根委員

やっぱり我々保護者がいつも考えていきたいのは、学校のことは先生だけに任せるものではないという意識を持つべきだと思っています。何か困ったときに、先生に任せますとか、学校に押し付けることっていうのはなくしていきたいと思いますし、何か困ったことがあれば、むしろ我々がこどもたちの生活しやすい環境を積極的に整えていきたいです。そういったこどもたちのいじめ防止の観点は、大人同士の良い関係性にもつながってくると思います。私もいろいろな活動をしていますけど、こどもたちや、その環境を良くしたいと潜在的に思ってる人たちは絶対いますので、そういう人たちを汲み取って、その人たちをちゃんと活かせるような環境があって、多様な人が関われる状態であればあるほど、いろいろなところに居場所ができて、それこそ閉鎖的にならずに済むような気もしています。環境整備もそうですけど、いろいろな事例を紹介していって、関わりやすい環境を作っていきたいと思っています。

〇氏家会長

校長先生の求められるものとか、幅広い意味での学校外の力と言いますか、児童生徒と教職員だけではない要素にも話が広がったかと思います。公教育を考えるとき、仙台ってすごく難しいと思うところがあって、学校の近くに比較的人のいるところといないところがあります。訪問させていただいた小学校の場合、一番印象に残ったのが、住んでいない方ですら学校に気軽に来れるとか、そしてこどもたちもいい学校だと思うから、卒業後の方が学校を賛美するような詩を残したという話を聞いて、学校に対する思い出を記録で残していけるような卒業生を生むっていうことは、それほどまでにこの学校は得がたい自分にとっての母校だと思わせたんだなって感じましたが、もしこどもたちに何か不具合があった時には、誰がどう対応するのだろうかということを考えていました。

今、人としての校長先生のお力、場としての学校を取り巻く要素や、学校外の人の関わり合いのようなところが、今話題として少し掘り下げられたかと思いますけど、学校の文化の流れの中で、いじめの未然防止に役立っているものということで、もし委員の方から何かございましたらお願いします。

〇本図副会長

資料１の私のコメントで、予防・対応・育成を３本柱とする云々というのがあるんですけど、包括的な力と、年間を通したカリキュラムの中での改善と持続可能性を考えると、これ自ら考え、自ら行動するになってるよね、では多分違っていて、小学校でお話を聞いた時も、ミドルの先生たちが、主幹の先生も含めて頑張っているところで、今なんとなくうまくいってるから、もしかすると先生方に「これでいいんじゃないの」っていう緊張感がないかもしれないというご発言もあって、こどもの力を育てる学校文化は大事なんですけど、でもこれがちゃんといじめ未然防止につながるかというところでは気が抜けないよねって思います。どんなベテランで、素晴らしいリーダーシップをお持ちの校長先生のところでもいじめは起きます。だから、そうならないように取り組んでいるわけですけど、その緊張感と意図的な働きかけと、これがこういう力につながってるよねっていう、そういう見方は大事なんだろうと思います。

〇氏家会長

歴史性とか文化であるとか、こうやってきたっていうのに依存しすぎてしまうと落とし穴が待っていると思います。今回訪問した学校は、比較的歴史性もあるところかなという気がしましたけども、それでも、今後、その歴史性であったり、慣習であったり、うまくいってる時の落とし穴が、おそらくいじめであったり、様々な意味でのトラブルの元になるんだと思います。そのあたりは逆に意図的に、校長先生のお立場にもなるかもしれませんけども、やはり慣習がこうだからこれでいいよね、だけではないものも、常に保っていく姿勢が必要なんですかね。赴任一年目の校長先生にすべてやってほしいとは思わないですけどでも、うちの学校はこれがやってきた習慣ですからで、はい、わかりましただけでは困りますよねということかなと思いました。私は縦割り班の話をよく聞くこともあって、本当に機能してる時は問題ないと思うんですけど、縦割り班そのものも、良さもあれば大変な部分もある。縦割り班さえやればいいとか、そういうものでもないんだろうなという気がしていています。学校の先生方からすれば、通常のクラスだけでも大変なのに、縦割りの機能までやると、そこにはすごい苦労があるのかなと思うんですけども、イコールそれがいじめ防止の方に何かつながるかっていうと、それはまた違うんじゃないかなと思います。

〇石川委員

そもそも学校って独特な世界ですけれども、何が違うかなっていうと、先生の姿を見てこどもたちが勉強だけではないものを学ぶというところが、まず学校の文化といいますか、それが一つかと思います。例えば、授業そのものが上手とか、特別活動をすごく一生懸命やっているっていうのはあるんですけれども、もっと基本的なところで、例えば、先生が人とし

て、こどもがちょっと不適切な行動をとったときにどう振る舞うかとか、そこをスルーしないで、そこは違うよねって言うとか、そこをどうだったのって聞くみたいな、そういうところをこどもたちは見てるのではないかと思うんです。うちの学校では、みんなが気持ちよく過ごせるように、決めたこととか必要なことはスルーしない。誰もみんな同じ指導をする。どこの学校でもやっていると思うんですけど、それが一つです。

世の中で生きていくルールはあるけれども、もっと人として、生活するときに必要なものを学校が教えるとか、教員が教えるところが一つ学校の文化なのか役割なのかっていうのがありますけれども、そこがすごく大きいかなと思うんです。それが確保されていれば、行事に参加しにくい人の居場所を保証できるのかみたいなご意見がありましたが、その子によって参加できるものとかできないものっていうのはあると思うんですけれども、少なくとも学校の先生たちがここはしっかり押さえておくといったところがあれば、こういう参加できない子であっても学校に居場所は確実にあると思いますし、他の子も自分と違うことをしていることイコール何か批判をして良い対象ではないという、そういう認識が持てると思います。いろいろな先生たちの行動とか学校の活動の中で、こどもたちが、自分が人としてどういうふうに振る舞ったらいいかを学べるというのが、学校の一つの機能であると感じています。もちろん先生の佇まいがすごく大事になってくるとは思うんですけれども、授業が上手い・下手よりかは、そういったところがすごく大事であるし、こどもたちにつかんでほしいと思っています。例えば、コミュニケーション能力の育成というと、人と何でもうまくコミュニケーションをとって、いわゆる陽キャみたいな、そういう子たちが増えればいいというものではなくて、必要な時だけ他の人と静かに関わるというコミュニケーションの仕方もあるというところが共通認識される、そういう働きかけがあれば、どの子であっても学校に居場所があるとか、世の中に居場所があるっていうふうになるのではないかな、それを学校時代に学んでほしいと思います。

〇氏家会長

おそらく先生方も苦労されているところだと思いますけれども、学校の持っている機能の中で、大人社会に出る前に、まずは学校という社会の中で、こどもたち同士の触れ合いで学ぶものもあるでしょうけど、何か教職員の後ろ姿から学ぶ要素は大きいわけですから、そのあたりのことを先生方はより一層意識してほしいというという思いがあります。先生のお話を伺いながら、表現がなかなか難しいなと思っていました。学校という社会の持ってる意味合いをもう少し教職員もより一層意識していきましょう。それは教職員だけじゃなく、保護者も意識していきましょうということになると思います。

〇村松委員

数年前、いじめの調査をした時に、学校で起こったことは外部に相談してはいけないというふうにおっしゃる先生方が結構いたことにびっくりしました。先生たち自身が自分の権利を守れるか、相談していいと本当に思っているか、そこを問われることがあるのかなと思います。先生も一人の人間で完全ではないということを、こどもたちにもっと出してもいいのではないかと思うことがあります。私も弁護士をやってきましたが、自分の権利が守れない者は人の権利も守れないと先輩から言われたことがあって、それは目から鱗でした。だから、先生たちも無理に、自分は一個の優れた教師、人間であるというふうに振る舞わなければいけないということを思いすぎているとしたら、少し軽くなってほしいと思いました。

〇氏家会長

大学でも今よく言われていますけど、主権者として、社会人になった時に最低限の立ち振る舞いや権利、それに他の人の権利もあるということに気づきを与えるための場所が学校であると考えたときに、その場で働いている側の先生の方が権利であるとか、自己・他者の権利に鈍感ではやっぱり困るなという部分はあると思います。おそらく各先生方が努力されて

いると思いますし、若い先生であったり、ミドルエイジの先生であったり、リーダーの先生方も自覚はされていらっしゃることではあると思うんです。ただ、こどもたちのいじめの問題があった時に、先生方ご自身が、こどもたち一人一人の訴えに耳を傾けていくようなものが、おそらく学校という場で一番こどもたちに見せなくてはいけない部分であり、その中で嫌な思いをしている子がいた時に察知してあげる能力がついてくるのかなと石川委員と村松委員の話から感じた次第です。

学校文化を生かしたいじめの未然防止というところは、人の問題と、人の問題であっても校長先生に求める部分と、場の問題として考えるとすれば学校の内外なんでしょうけども、逃げ場と言っていいのかどうかわかりませんが、少なくともいじめなり困難にあったというとき、助けを求められる場があることの重要性は盛り込みたいなと思いました。伝統や地域特性に委ねながら、学校が色づいてくる部分はあるんでしょうが、それでも先生方にはさらにそれをこのままでいいのかと思っていただくような部分の重要性、あと最後になりますけども、権利の主体となっている部分は教員側にもあるわけであって、そういうところが無自覚なままだとこどもたちの困難さに気づかない部分も出てくるのではないかなと思います。先生方は教科指導、授業とかだけでない部分として、いろいろな意味で大人の見本になっている部分もあるという点について、少し言葉を選んで表現してみたいと思った次第です。

それでは、もう一つのテーマ、仙台市いじめ等相談室エスケットの議論を深めてまいりたいと思います。私がヒアリングで思ったのは、どうしてもエスケットの要素なのかそれが弁護士としてのプロフェッショナリズムから出てくる言葉なのか、その弁護士さん特有の考えなのかというのは結構渾然一体となっている部分があるのではないかと大変危惧したところです。私はエスケットとしての意見というよりも、弁護士さんの役割を担っている人の意見というふうに聞かなくてはいけないのではないかと思ったところでした。

〇村松委員

その弁護士の方だから、ヒアリングのときのお話をこういうふうに展開したとは私は思ってないです。エスケットで勤務する弁護士はこどもの権利委員会の弁護士です。少年事件やいじめの第三者委員などを経験しています。こども関係を扱っていない弁護士よりは、こども・少年に対する思いは熱いですが、その弁護士特有の言い方をしているということはないと思います。他の弁護士も同じだと思っていただいて結構だと思います。

その弁護士の方と私は、昔、いじめで不登校となり、学校に行けないというケースで、一緒に学校に行くことがありました。私たちは学校を攻撃するために行っているのではなく、こどもを学校に戻してほしい、みんなと一緒に学ぶ場を提供し続けてほしいっていうことで、話し合いができるといいなと思い行きました。だけど、学校からは、敵に思われてしまい、そこが突破出来ませんでした。それを踏まえて、やっておられると思います。

私たち弁護士は学校に厳しいことを言うこともありますけれども、基本的にはこどもたちが健全に育ってほしいと思いますし、先生たちも無理に無理を重ねて過労死するようなことはやめていただきたいと思っています。

〇氏家会長

私は弁護士の方といろいろ仕事をする場面がありました。今回の弁護士の方のお話はすごくしみ入るものもありましたが、言葉としては想像以上の力があったなと思いました。

〇村松委員

弁護士がいじめの相談を受けるときは、基本的に全部の話を聞きます。だからエスケットの活動と全然変わっていない。いろんな感情面も含めて、何が起こって、何を把握してて、自分で学校に対しては何を要望しているか、何を期待しているかっていうことを聞きます。別にこのエスケットだけではなく、いじめの相談に乗りますと言った弁護士はそういう態度で聞いて、論点整理をやってます。

〇氏家会長
維持させていくにはどうしたらいいかも考えなくてはいけないかなと思います。

〇村松委員
たとえ仙台市にいじめの相談がなくなっても、エスケットは存続してほしいと思っています。学校が把握している・していないに関わらず、学校に関する相談というのはあってしかるべきです。聞いていただける受け皿ということでエスケットを位置づけるときには、これはずっと存続してほしい組織なので、廃止するのはずいぶん後でいいと思います。

〇氏家会長
事務局に伺いたいのですが、エスケットは今後も存続するということでよろしいでしょうか。続くのであれば、様々な意味で、より良い形となるよう求めていきたいですよね。

〇事務局（いじめ対策推進課長）
もちろん存続していきます。S-KET は開設してから 6 年ぐらい経ちまして、この間、ご意見を頂戴して、オンライン相談を導入したり、面接相談した方に満足度を聴くアンケートを行ったりなど、見直しをしてきているところです。これからもいろいろご意見をいただきながら、見直しできる部分は見直ししてまいりたいと考えております。

〇氏家会長
いじめ対応の流れからできている組織という部分はあるかと思いますけど、ただ学校という公的機関と、その利用者が何らかの形で衝突をしてしまったり、利害が生じたりした時の第三者の位置づけといいますか、調整役・マネジメントはやっぱりすごく今回機能しているのは、肌で感じた部分です。なくなるわけではないのを前提としてということにはなりますけれども、すごく意義がある場所だということは再認識した次第ではないかなと思います。
大曽根委員、いかがでしょうか。

〇大曽根委員
私もエスケットの仕組みはだいたい理解しているつもりでいましたが、きちんと弁護士さんや相談員さんのお話をお伺いして、なるほどって思ったところもすごく多かったです。先ほどもお話ししたとおり、選択肢が多くあることが非常に大切だと考えています。第三者的な立場の機関があることで、別の視点から論点を整理したり、必要に応じて専門家につないだりできることは、とても重要な仕組みだと思います。実際に「エスケットには話せるけれど、学校にはなかなか話せない」という方も多いと伺いました。保護者の立場からすると、こどもが通っている学校との関係を考え、問題を大きくしたくないという気持ちが働くこともあるのではないでしょうか。だからこそ、学校とも家庭とも異なる第三者の立場から、弁護士や心理の専門家などにワンストップで相談できること、さらに匿名性が高く、安心して相談できることには、大きな意義があると感じています。
現在、特に若い世代では、何か問題に直面した際、まず AI に相談し、そこで得られた回答や意見を参考にする傾向が強まっていると感じます。これは大学生たちも同様の傾向です。もちろん、AI の回答が必ずしも正しいとは限りませんが、匿名性が高く、気軽に相談できる相手にまず悩みを打ち明けることは、自分の心理的な負担を軽減し、問題を整理するきっかけにもなります。そうした観点からも、エスケットのような機関の存在は重要だと思います。
一方で、相談員の皆さんから直接お話を伺い、相談対応に伴う業務負担の大きさについても考えさせられました。例えば、一般の業務であれば、録音した音声を自動で文字起こしするシステムなども広く利用されるようになっています。しかし、いじめに関する相談は秘匿

性が高いため、相談記録の作成にあたっては、手書きで記録したり、音声の文字起こしを人の手で行ったりするなど、多くの時間と労力を要していると伺いました。非常に意義のある機関であるにもかかわらず、こうした事務負担が相談員の皆さんの疲弊につながりかねないこと、また、負担が大きいからといって簡単に人員を増やせるわけではないことに、難しさを感じました。情報管理の安全性を確保しながら、記録作成などの事務負担を軽減する方法はないのか、検討する余地があるのではないでしょうか。こうした課題は、実際に現場で働く方々から直接お話を伺わなければ、なかなか気づくことのできないものだったと思います。

そして、今回のお話を通じて、私が特に重要だと感じたのは、エスケットがいじめの重症化を防ぐ役割を担っているという点です。エスケットは、いじめそのものを未然に防ぐというよりも、すでにいじめの兆候が見られたり、問題が発生したりした段階で相談を受け、深刻化を防ぐ役割が大きいのではないかと感じました。お話を伺う中でも、学校側の言い分と本人側の言い分が少しずつ異なっていることがあり、第三者機関が間に入ることで、それぞれの主張や認識の違いが整理され、本質的な解決につながった事例があると知りました。今回、エスケットの意義を改めて理解するとともに、いじめの重症化を防ぐという観点からも、その存在の重要性を確認できたことは、大きな学びとなりました。

〇氏家会長

公衆衛生と言われるような考え方、二次予防というのに入りますが、重症化予防でもあり、それはよくワクチンにもなぞらえられる時がありますけれども、未然防止っていう風なものよりは、まずは相談したいと思った方が駆け込みやすいところとしては、非常に画期的な場所だと思います。そう考えると、未然予防ではないという風になってしまうかもしれませんが、事にならないうちに解決するものとして機能されているのかなと私は思いました。

学校にはスクールロイヤーもいると考えた時に、学校よりもエスケットの方が相談する敷居が低いっていうのもあったのは、どういうふうに整理していったらいいのでしょうかね。

〇村松委員

エスケットの弁護士は、スクールロイヤーとは全く別物です。

こどもの人権を守るという点では、一緒なんですが、スクールロイヤーは、学校サイド、先生サイドには立ちますが、先生方が抱え込まないで相談をしてほしい、その方が軽く済むのではないかという観点で活動しています。スクールロイヤーは学校側の代理人にはならず、被害者と称されるこどもさんと親御さんとは対立関係の場面には立たないでこどもの人権を守るという観点で活動しています。スクールロイヤーもこどもの権利委員会から出ています。

エスケットも、スクールロイヤーも、そのような点を矛盾なく、弁護士は活動したいと思っています。学校の代理人的な活動をさせられるのであれば、ちょっと違うかなと思っています。

〇氏家会長

画期的だと思うんですよ。ない町の方が多くて、仙台はエスケットという形を持っているわけです。だからこの機能で考えたときに、今、スクールソーシャルワーカーもいる流れの中で、プラスでこのエスケットがあるっていうことが大きいと思います。そのあたりの専門職っていうときに、あとは心理スタッフの方も充実というか、だからその維持をどのようにしていくのかという課題があると思います。ずっとこのエスケットがあることによって、まさに大曽根委員のおっしゃるような、本当にいじめそのものが話題にすらならなくなるようなぐらいのところまでどうやったら運べるのかっていうのは、もちろん簡単に答えが出るものではないとは思いますけども、画期的な場所だなとつくづく思いました。

〇村松委員
エスケットは、事後的救済機関ですからね。あくまで事後的なんです。そういう意味では、いじめ予防は、その学校文化というか、学校でそういうものを予防してくださいと学校の先生たちに期待せざるを得ない。
でもいじめが人間関係において不可避的に起こるんであれば、問題が起こってしまった場合、その相談場所としてエスケットを活用してくださいということです。エスケットがあるから予防活動として十分だなんていうのはとても言えないところです。

〇氏家会長
エスケットについて、村松委員が整理してくれたところが全てかと思いますけれども、他に何かございますでしょうか。

〇石川委員
いじめ予防が重視されるのであれば、そもそもエスケットまで相談に行かない段階で、学校で何とかしないといけないかなとは思うんです。ただ、それが全部できるかというと、もう到底無理だと思っています。学校現場では、多様な考え方があるので、これが正解みたいなものではないと思うんですね。難しい案件に対して、エスケットが整理をしてくれるところはすごく大事だと思うんです。教員のものの考え方とは違った視点におそらくなると思うんですね。学校だと、例えば被害があって加害があってっていうのがだいたいで、それだけではないケースもありますけれども、そういうお話になるとは思うんですけれども、エスケットの場合、そうではなくて、こどもの権利を守るためにどうするかっていう別な視点になってるので、学校はどうしてもいじめられた、もうじゃあごめんなさいねって謝るとか、学校に来られません、でも来られるようになったね、だからいいではなくて、この子の権利は何で、そこが侵害されているっていったところだと、先生方もすごくホッとすると思います。要は、先生の対応が悪いからここまでこじれてるんでしょうみたいなのではない。先生たちがここまで頑張ってこうやってくださいっていうのではなくて、権利を保障するためにそれぞれがこういうところを目指してやっていきましょうっていう、そこの視点がもらえるっていうのが、学校現場としてはエスケットに期待するし、そこをもらえるのがありがたいところだなと思います。ただ、「エスケットにうちのこどもが相談しました」とか「保護者が相談しました」って学校の教員が言われて、エスケットから連絡が来たらおそらくすごくびっくりするだろうし、学校としては自分のところで何とかできなかったのか、他の機関の力を借りざるを得ない状況までしてしまったというところを引け目に感じる意識は確実にあるだろうなとは思うんです。目的はそこじゃない、学校がいいとか悪いとかではなくて、求めるところがそこではないっていう視点が持てるかどうかが大事かと思います。

〇村松委員
学校の先生が「（生徒や保護者が）エスケットに相談に行った」ということを、引け目や自責の念に駆られるなどはしないでほしいと思います。誰でもみんな第三者に相談していいんだ、学校のことだろうといろいろ相談していいんだっていうのを本当に思ってほしい。そうでないと、学校の先生がしくじったみたいに思いますよね。いじめって学校では起こるんだけれども、でもその根源は学校だけが問題じゃないことも多いのです。家庭の問題でDVがあったりとか、兄弟間でいじめがあったりする場合もあるわけです。全部を学校の責任だとは誰も思っていないので、そのあたりをもう少し考えていただけたらと思います。

〇氏家会長
そこが難しさになっていると思います。どうしても現象面で見えた部分になってしまうところだけが取り上げられて、こどもや保護者が外部機関にSOSを求めたとなると、世の中には解決できなかったのかみたいに思われてしまいます。エスケットの機能も多分異論はない

ところではありますけど、そのあたりが課題として残るかなっていう思いもありました。それぐらい素晴らしい機能なんですよ。そういった今の機能の良さをどのようにして維持していけるかっていうのは、これは立派な課題になるのだろうと思った次第で、だからこそ、存続させていかなくてはいけないと思いました。

〇本図副会長

年間 15 回ぐらい学校との対応を調整しているというお話や、先ほど事務局から改善も重ねてきたというお話も伺って、私としては、本当に相談員の方含め、室長、弁護士さん含め、本当にご見識と情熱を持っておられて、素晴らしい大事な機関だと感じました。

〇氏家会長

エスケットの方も、いじめの相談機関があるっていうだけのものではない力っていうんですか、その役割を再認識した次第です。今回の流れですと、他にはない仙台市独自で持っているものの存在意義のようなところと、あと逆にあるがゆえに機能する部分は未然防止でない部分の要素の方が大きいから、そうするとやはり未然防止の方として考える部分としては、エスケットがあるからだけでは済まないもの、個々の学校の対応などの方もますます問われる部分があるっていうことが宿題になるのかなという気がいたしました。

最後の方でもお話が出ておりましたけども、解決すると本当にみんな笑顔には戻ると思いますけども、学校の先生の中には、自分たちが解決まで本当は持っていけたのではないかって思われる方などがいて、エスケットに相談があったことで、自分たちがやれたかもしれないとかっていうところの方に行かないようにするという視点も重要だと思います。いじめの問題の中には、先生方だけで解決できない問題もいくらもあって、その部分の補完として今回エスケットがすごく有効に機能していることを確かめた部分については、今年度の報告の中にあげたいと思います。ただし、そういう意味では市民の方にはより一層啓蒙と言いますか、エスケットの利用も片方で言いつつ、もう片方では未然予防のためにはエスケット任せだけにはできないところがあるんですよっていうあたりを報告書の方に盛り込まなくてはいけないのではないかなというのが今のお話を聞いてて感じた次第です。

委員の皆様からいただいたご意見につきましては、会長の方と事務局の方に委ねさせていただいて、委員の皆様にもチェックしていただきながら、市長報告の草案に着手してまいりたいと思います。お忙しいところ恐縮ですが、年内にもう１回会議を開催させていただく予定です。その他、何か確認したいことがあれば、どうぞお願いします。

〇本図副会長

1 点お願いがあるのですが、ヒアリングでは、学校文化についてお聞きしたので、報告書をまとめるときに、学校別にどうなのかっていうのがわかるように工夫していただきたいです。今回の資料は、ちょっと読みにくいので、ポイントとなるところを太字や下線にするなど、ぜひ各校の素敵な学校文化が見ていただいた方に伝わるように、ご検討いただけたらと思いました。

〇氏家会長

ヒアリングで伺った学校ごとの取組みについては、ボリュームがあるので報告書に盛り込もうとすると煩雑になる部分がありますが、各学校が培ってきている地域特性や歴史性、先生と児童生徒の努力もあると思うので、この学校の場合はこういうところですよというのが少し見える形で工夫してまいりたいと思います。以上で本日の会議を終了いたします。

５　その他

なし

６　閉会